第 2 部

各自のテーマ

１．　マングローブ植林とサイクロン被害について・・・・・・・・・・　赤羽　洋

２．　バングラデシュの開発における NGO の役割　・・・・・・・・・・　泉川　洸

３．　廃棄物処理問題を通してバングラデシュを考える・・・・・・・　竹森　絵望瑠

４．　バングラデシュにおける教育の現状と課題　・・・・・・・・・・　中村　あゆみ

５．　バングラデシュの農村　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　古田　美幸

６．　バングラデシュにおける開発と環境保全
～持続可能な社会に向けて～　・・・・・・・・・　李　尚美

２－１　マングローブ植林とサイクロン被害について

赤羽　洋

バングラデシュは国土の 8 割が海抜 9m以下を占めており、洪水や冠水などは毎年のように発生しており、問題になっている。特にベンガル湾地域におけるサイクロンに関しては、人命や家畜やその他財産などに大きな被害をもたらしており、政府としても危険性を認知し、防災に取り組んでいる。それら被害の軽減のため、OISCA では「緑の防波堤」と称し、植林活動を続けてきた。ここでは、サイクロンのもたらす被害に対して、マングローブ植林がどのように影響しているかを考える。

（1） サイクロンのもたらす被害とは

1991 年、バングラデシュはかつて無いほどのサイクロンに見舞われ、14 万もの人命が失われ、家畜や家屋、農地など壊滅的な被害を受けた。サイクロンというと強風による倒壊などの被害に注目してしまうが、最も恐ろしいのは高波の被害である。およそ 5～8m になった高波は内陸の 5～8km まで遡上し、多くの被害が発生した。高波のもたらす被害としては、まず波によって人がさらわれる、家畜や財産が水没、倒壊するなどの他に波がもたらしたゴミ（木やその他浮遊物）による被害がある。かつては、海岸線にマングローブ林が植生していたために、それらの被害を軽減していたが、薪炭材利用などによる伐採が進み、森林面積が減少したために被害が増大していった。

（2） マングローブ林の持つ役割

以上の被害を軽減するために、JICA ではサイクロンシェルターを建造し、避難場所の提供を行っている。OISCA では森林のもつ災害軽減機能に注目し、マングローブ林を造林することによってサイクロンによる被害を防ごうと考えた。マングローブ林があることにより高波を和らげるのと同時に波の運ぶゴミを網のように絡め取るという機能がある。高波の被害を防ぐという目的を考えた場合、日本のようにテトラポットを海に沈め、海岸線をコンクリートで埋めることが効果的であるだろうが、それほどの予算が組むことができるのか、自然保護の観点から見たら問題があるのではないか、元々バングラデシュにはあまり岩が少なく砂利が得られないのでは、など実際には上手くいかない部分を多く持っている。森林はその他の公益的、多面的機能を発揮できるために、総合的に見ると非常に有効であると言える。

（3） 人々との関わり

OISCA では現在までに政府の指定した国有地に 474ha の植林を行ってきたが、現地の人には何故そのような活動をしているのかを理解していない人がまだまだ多い。それらを理解できていない村人は、植林した地域に水牛を放牧して苗木を枯らしてしまったり、木材利用のため伐採してしまったりする。また、私有地に関しては今までマングローブ林だったところをエビの養殖池に変えてしまうことが頻繁に発生する。このようなことを防ぐためにはまず、現地の人々が活動を理解することが必要である。特に地主の理解というのは重要である。小作人が理解していたところで、その土地の利用についての意志決定は地

主にあり、小作人には決定権が無いためである。

OISCA では植林を行う際に現地の子どもたちと一緒に植林を行い、植林の意義を理解してもらう活動や学校に出張講義を行うなどの活動を行っている。また、政府としてもこの植林活動は奨励しており、国有地への植林誘致、情報の提供の他に、自分たちでも植林を行うことにも意欲的である。

（4） 植林活動普及のために

植林活動を普及させるためには人々の理解と国土保全という面から含めた政府の支援も欠かせない。森林には木材として市場に流通させることのほかに先に述べたように高波やその他災害を軽減する機能を備えている。それらを回復、維持するためには、国がある程度補助し、植林活動を普及させ、より一層の森林面積の拡大を図る必要がある。ただ、バングラデシュ政府に資金的な援助を求めることは厳しいため、制度の改善や環境整備など、資金のかからない面でもっと現地の人々に利益が得られるようなシステムを作るということは重要である。

例えば、現在の植林地で十数年経過しているマングローブは木材としても利用できる程度に生長している。木は基本的には若いときほど生長量が良いためにこのままの状態で管理していけば生長量は低下する。よって、そのまま放っておけばあまり利益にならないが、一つの例として間伐を行うことにより収入を上げることができるのではないだろうか。しかし、そこが国有地であることやもともとが災害防止で植林されたことなどの背景から現在のところそれらが行われる計画はない。マングローブ林という特殊な森林ではあるが、日本やその他の国の林業のように、しっかりとした森林管理の知識があれば災害を軽減させる機能を失わせることはなく、むしろ森林に対して健全な状態を維持することができるのではないだろうか。現在の制度では自分たちで植林していても伐採を行った場合、5 割の利益は政府に配分されるようになっており、自立的な経営にはほど遠い。OISCA では現在、この割合については政府と話し合いを持っていると言うが、現地の人々が生業として林業を行うには、これらの利益を生む為の制度改革やシステムの構築は重要なのではないだろうか。利益になると分かれば、人々はもっと森林に興味を持ち、エビの養殖池にすぐに転用を図らなくなる可能性もある。環境保護と言う視点だけではなく、経済という視点で見たときにどのような方法が良いかを様々な面から追求していかなければならないのではないだろうか。

２－２　バングラデシュの開発における NGO の役割

泉川　洸

バングラデシュで最初に活動を始めた民間団体は 1794 年バプテスト・ミッショナリー・ソサイエティと言われ、欧米の NGO としては、Ford Foundation が 1950 年代、CARITAS が 67 年、CARE が 70 年代の自然災害や難民への救済活動をきっかけにバングラデシュで活動を始めており、バングラデシュ建国以前に活動を始めていた団体は数団体だった。1971 年 12 月、10 ヶ月におよぶ戦争の末、東パキスタンは西パキスタンから分離独立し、「ベンガル民族」の国としてバングラデシュが建国された。戦争に傷つき、国境付近に逃れたバングラデシュの民衆の惨状が世界各国に報道され、世界中の政府や援助団体から多くの寄付や物資が寄せられ、現地に乗り込み救援活動を始める欧米の NGO が相次いだ。

当時、欧米 NGO の活動にボランティアとして、また雇われたスタッフとして関わるバングラデシュ人も多くいたが、バングラシュ人による NGO も数多く組織された。この頃の NGO は、現在も影響力をもつ団体が多く、代表的なものに BRAC(Bangladesh Rural Advancement)、PROSHIKA(Proshikon=研修 Shika=学ぶを結合させた造語)、GUP(Gono Shasta Kendara)、GSK(Gono Shasta Kendara=民衆健康センター)などがあり、現在も精力的に活動を続けている。

1. 開発戦略の流れ

バングラデシュで活動する NGO の内容は多岐にわたるものの、その活動の主流は村落開発にあり、活動スタイルの流れを知る時、それを考える必要性があるという。そしてこれまでの活動スタイルの流れを考える時期として、救援活動から開発活動への移行までの時期(1972 年～74 年)、農村貧困層で組織作りを始める時期(1975 年～80 年前半)、多様な活動内容の展開時期(1980 年前半～80 年後半)、無担保小規模ローンの時期（1980 年代～現在）と四つに分けられる。

バングラデシュで活動している NGO は、主に農村地域に住む人々を対象に、住民自身の参加を促す形で活動している。ダッカに本拠を置く NGO が多いが、地方に根ざして活動する団体も増えてきている。さだかではないが、約二万の NGO が国内で活動、その中で政府に認められ登録済みなのが国内 NGO で約 1,700 団体、国際 NGO は約 180 団体となっていて、海外ドナーからの 2004 年頃で 2～3 億ドルに達していると見られている。かなり多くの NGO が存在するが、それらの NGO は教育を受けたリーダー達によって運営されている。国際 NGO はバングラデシュの人々が中心となり、それを外から支援するという形なのだ。海外の諸政府はその国際 NGO に対し、資金援助や直接援助を行っている。

2. バングラデシュ研修センターの事例

首都ダッカ近郊のサバールにあるオイスカ研修センターでは、依然として大規模な貧困層を抱え貧困削減が最大の課題となっているバングラデシュで、農村開発を第一に捉えそのためのリーダーとなりえる農村青年の育成を中心に活動をしていた。

責任者の宮嶋団長から話を伺ったが、1981 年から 2002 年までで、24 期 370 名が修了し、

ここで指導する現地の先生方もオイスカ研修センターの出身だという。この研修の成果としては生活習慣から農法においての効率が改善されていることにある。研修生同士の団体生活による連帯意識の向上や農業もバングラデシュ旧来の方法ではなく有機農法や新しい農法を取り入れることができるということだ。

改善したいこととしては時代とともに技術が進んできているので、農業機械を導入し技術を伝えたいこと。その点も踏まえて政府の海外技術協力推進団体補助金が 2003 年度限りで廃止になったことで、自立の運営が難しくなり資金難だと述べていた。また研修センターの現地の後継者育成と運営の受け渡しも一つの課題である。近年ではではダッカ近郊 EPZ(輸出加工区)が広がっていることで工業化が進み、農業と工業そして環境との共生も考えなければな

オイスカ研修センター

3. PROSHIKA 人材開発センターの事例

プロシカは農村の貧困層を対象に、組織することで農村開発を進めてきた。村人自身が開発の主人公になること村人の自発的な努力なしに開発はありえないという立場に立っている。そのためプロシカは村人を組織し、組合(ショミティ)をつくり農村の貧困層を対象に、組合づくりをはじめるという考え方で、バングラデシュの中で高く評価されている。現在では、他の NGO とのネットワークの中で技術協力をするなど、開発戦略の共有もしているということだった。

PROSHIKA の織物工場

4. NGO の課題

ここまでで開発に関わる NGO の経緯や役割について考察してきた。その中での現状の改善点について最後に述べたい。

(1) NGO 間の連絡調整やネットワークの強化
(2) 外国の資金への依存
(3) 大規模 NGO への援助資金の偏り

(1) に関しては規模の小さい NGO 同士が互いに連絡を取り合い、相互協力と情報交換をすること、活動内容や活動地域の重複を避け、効果的な活動を促進させる。しかし独自性の強い NGO は互いの活動の仕方や利害関係に左右されやすく、まだ十分なネットワークをつくれずにいる。(2) は依然としてバングラデシュ NGO は外国からの寄付や ODA 資金に極度に依存した財政状況にある。特に欧米ドナーへの依存が強いため、先進諸国のドナーの思惑の合間で揺れ動くというジレンマがあるという。ダッカ郊外にある輸出加工区(EPZ)

に多国籍企業が進出してきており、工業による雇用が増えてきているようだった。しかし同時に河川の環境汚染も危惧されている。私たちはEPZにある日本企業のYKKを訪れた。1970 年代から日本では公害問題が起きて以来、日本の企業では社会的責任(CSR)という言葉が一般的となった。このようなことからNGOと企業が互いの専門性を活かし、連携し合うということが求められるようになってきている。NGO のメリットとしては資金面を補助してもらうことが大きなメリットとなり、企業としては地元コミュニティーに貢献し、企業に付加価値をもたらすことができる。そして、その企業は市場や地元住民の信頼を生み出すことにもつながる。しかし、農業が大半を占めているバングラデシュで工業の発展は半ばであると考えられる。よってまだ企業との連携による資金の獲得は難しく、誘致されている企業はダッカ近郊に限られていると思う。まだまだ大型NGOが大規模な手工芸品ショップの経営から得る資金、自主的に生産する物産や民芸品を売ることが主流なのかもしれない。(3)ではダッカ市内に大きな事務所をもつ大型のNGOばかりに活動資金が集まり、地方を拠点にしている NGO にとって、十分な配分になっていない。NGO の活動はインフラの整っている場所に偏りがちで、活動の重複があるという。大型のNGOもこれを免れない。できるだけ NGO の活動の重複をさける意味でも、遠隔地や幹線道路から離れた場所で NGO にも一定の資金が流れる必要がある。どうしても先進諸国のドナーの活動範囲がダッカ周辺に偏る。現場を検証して支援決定を行うよりも申請書レベルで判断をしがちで、遠隔地活動するNGOでもよい活動を行っている場合、外国への資金のアクセスが可能となるようなドナーの配慮が必要とされている。これらのことをまとめて考えていく必要がある。

【参考文献】

開発援助とバングラデシュ　佐藤寛　編　1998 年
アジア研トピックレポート NGO の現在　国際協力活動の現状と課題　吉田幹正　編　1997．8
途上国の民間公益組織(NGO)実態調査　財団法人国際協力推進委員会　昭和 60 年 3 月
オイスカHP：http://oisca.org/project/bangla/tc.htm

２－３　廃棄物処理問題を通してバングラデシュを考える

竹森　絵望瑠

１．はじめに

バングラデシュ人民共和国（以下、バングラデシュと略）についての多くの日本人の印象は、「貧困国」「洪水害や台風害が頻発する水害国」「海外出稼ぎの国」といったものではないだろうか。私自身も、以前はその様な印象を持っていた。しかし、大学生最後の夏に訪れたバングラデシュは、「異文化理解」・「イメージと現実」という視点から様々なことを私に学ばせてくれた。そこで、廃棄物処理問題を通して、この国の表情の一つをとらえてみたい。

２．バングラデシュの廃棄物処理問題

（１）バングラデシュの廃棄物処理の現状

訪問期間中の 2006 年 8 月 27 日に、JICA による廃棄物処理プロジェクトの視察をさせて頂いたが、この視察以外でも、例えば EPZ で、GOMAIL の学校訪問で、もっと身近な例で言えば、まちを歩いている時や移動中に車の窓から、バングラデシュの廃棄物処理問題は見えてくる。そこでは、道路脇や排水溝にゴミが詰まっていて、雨期には溢れかえってしまう状況が予想できた。ゴミは収集場所に集められるというより、雑然と重なっている印象だった。この状況は、特にダッカやジョソールなど都市部で顕著に見られた。

バングラデシュでは、都市部の人口が年々増加（5.6%／年）しており、都市圏における廃棄物処理が急務となってきている。とりわけ、ダッカ都市圏は、現在人口が 1 千 2 百万人を超え、増大する廃棄物の管理が大きな社会的課題となっている。

JICA のプロジェクト視察の際、私が一番の課題だと感じたのは、この国では廃棄物の適正処理を行うシステムが確立されていないことである。

例えば、一般廃棄物と医療廃棄物、産業廃棄物が分別されずに投棄されていることで、収集作業員やウェイストピッカーが医療廃棄物（使用済み注射針やガーゼなど）からの感染症などの危険にさらされている。加えて、ブリガンガ河の視察では、街のゴミや工場から出る排水が河へと流れ込む様子を見学した。産業廃棄物を分別していないことによって、有害物質を含む汚水による地下水汚染も懸念される。

また、人体に悪影響がある電池などの回収方法も確立されていない。電池の処理を行う現場の視察では、マンガンなどが積もって、真っ黒な山の様になった場所で 10 人～15 人ほどの女性が、使用済み電池を分解して中に入っている炭素棒を取り出す作業をしていた。この電池山はかなり以前からあるそうで、彼女たちは、手袋もマスクもなく作業をしていた。その理由は、雇い主が危険な作業だと彼女たちに知らせていないからである。しかし、彼女たちからは、頭痛やだるさなどを訴える声が聞かれた。彼女たちは辛くても生活のために我慢せざるを得ない。電池山では写真撮影を控えるようにと言われたが、彼女たちが嫌がるという理由の他に、雇い主がＮＧを出しているということも考えられるという。

このように、バングラデシュでは適正な廃棄物処理をするシステムがないように思える。

また、社会階層的には低い層が、システムがないことによって苦しい生活を強いられている。

（2）C.マロニーの無干渉路線

バングラデシュの都市化に伴う問題については、様々な専門家が意見を述べている。その中で文化人類学者マロニーは、無干渉路線という政策論で、今後先進国からバングラデシュへの援助が減少することを予測している。

> *バングラデシュの今後の展開は、外国援助機関の主導で行われるのではなく、その方向性の決定は地域住民自らの手にゆだねてしまうのが賢明である。その解決に西欧流の方法がとられなかったとしても、住民自らの決定である以上、これに先進国が干渉してはならない。*
> *この場合、外部からの援助は大幅に削減されることになる。*

このマロニーの考えを参考に、私自身が考えるのは、ウェイストピッカーを利用する資源循環システムである。バングラデシュでは、ウェイストピッカーがリサイクルを促して、資源循環の輪を作り出しているように感じた。例えば、プラスチックは色別に収集し、リサイクル業者へ売ることが出来る。機械の部品やゴムなどもウェイストピッカーの収集対象となる。つまり、ゴミはお金になるのである。

廃棄物収集を一定の業者や行政が、一定の時間に行うことは私達にとっては理想的な収集方法に思えるが、それをバングラデシュで行う場合、むしろ資源が無駄に処分されてしまう可能性はないだろうか。

（3）バングラデシュにおける廃棄物処理

バングラデシュに既にあるウェイストピッカーという制度を活かして廃棄物処理をスムーズに行うことは可能だろうか。そこで私は、ウェイストピッカーをリサイクルの担い手として利用していってはどうかと考える。例えば、漠然と収集を行うのではなくグループを組織して資材別収集を行えば、今より効率的かもしれない。また、買い取り業者に対し一定の買い取り料金基準を定めることなどでウェイストピッカーの人々の生活が安定するのではないだろうか。

また、何よりも大切なのは、ゴミを出す側の意識改革である。資源になるものとそうでないもの、人体に悪影響があるものとそうでないものなど、きちんと分別していく意識がこの国の人々に芽生えなければ、いつまでも廃棄物処理問題は解決しないだろう。

3．さいごに

私達が生活していく上で、必ず出る廃棄物をどの様に処理していくか。これは途上国に限らず、私達地球に住む人類全体の問題である。バングラデシュの人々は非常におおらかであったが、自分の玄関先でもかまわずにゴミを捨ててしまう人が多いと聞くと、ことゴミ問題に関しては、そのおおらかさが裏目に出ている気がした。

また、バングラデシュに限らず、いつでも影響を受けるのは社会階層的に低いところの人々である。特にバングラデシュでは、未だに行政側のサポートなどが行き届いていない部分が多いようなので、早急に廃棄物適正処理に関するシステム作りがなされることを希望する。

しかし、このように報告書などを書いているが、バングラデシュ（ダッカ）では、一人一日に 0.5kg のゴミを出しており、日本人の一日に出すゴミの量はその倍の１kg である。基本的にシンプルな生活を送る人が多いので廃棄物の量は少ないと言えるだろう。我々もバングラデシュという国を通して見つめ直せば、多くの無駄が見えてくることは間違いない。他人を知って、己を知る。影響を与え合うことで、よりよい社会が作って行ければいいと思う。

【参考文献】

JICA 訪問時に頂いた資料

「バングラデシュ低開発の政治構造」　佐藤宏著　1990 年

２－４　バングラデシュにおける教育の現状と課題

中村　あゆみ

１．はじめに

今回の研修内容の中で主要な訪問先ではないものの、それぞれ様子や形式の異なった三つの小学校を見学する機会があった。バングラデシュを訪れるにあたって、特に見てみたいものの一つだったのが教育施設である。少子化や不登校などの問題はたくさんあるにせよ、基本的に日本ではとても恵まれた教育環境の中で、教材にも不自由することなく勉強することができる。私もこの環境が当たり前だと思って成長してきた。しかし、教育というものはどの国へ行っても当たり前のように受けられるものではないという現実があるので、バングラデシュの子供たちがどのような学校環境でどの程度学ぶチャンスを得られているかを実際に目で見て知りたかったのである。

国連によるミレニアム開発目標（MDGs）にも「目標 2：初等教育の完全普及の達成－全ての子供が男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」とあり、途上国における初等教育の充実が世界的にどれほど大きなテーマかということが伺える。バングラデシュの各学校を訪問してわかったこと、考察したことをまとめてみる。

２．３つの小学校を訪れて

まずバングラデシュの基本的な教育制度について教えていただいたことをまとめると、義務教育は elementary school の 5 年間のみで、その後 high school（日本で言う中学校）に進みさらに 5 年間学ぶ。そして college で 2 年間学び、ここまでの年数がちょうど日本の小・中・高等学校の 12 年間に相当するようになっている。university は 5 年制だが、ここまで進学する人はほんの一握りなのだそうだ。

最初に訪問した学校は、オイスカ研修センター滞在中の 9 月 1 日に訪れたサバール・ゴマイル村の Gomail　high school である。この学校は 1993 年に日本の団体による出資により設立された学校である。現在の生徒数は 780 人で 1 クラスは大体 45 人である。この学校では制服を買えない貧しい家庭の子供には必要な額を援助しているため、全ての生徒が制服姿であった。宗教という教科があり、その時間には教師も生徒もイスラム教、ヒンドゥー教それぞれに分かれて授業を行うが、その他国語、数学、社会、理科、体育、英語（バングラデシュでは小学校 2 年から英語を学ぶ)といった私たちにもなじみのある教科では、そのような宗教による区別はなく皆で勉強しており、男女も同じ教室で過ごしている。今から 20 年前くらいまでは男女の区別が厳しく、クラス分けはおろか男性教師が女子生徒を教えることさえなかったという。この日見た子供たちの、男女関係なく親しそうに話している姿はそのような社会的格差の改善の表れのように見えた。

次に訪問したのがジョソール・ケシャプール郡の Banarkata primary school である。砒素汚染地域の村を回った 9 月 4 日に見学した村の小学校で、最高学年である５年生のクラスの様子を見せていただいた。クラスは男子 18 人、女子 21 人で、同じ教室で授業を受けているものの、席は男女ではっきりと分けられ混じることはないという。好きな教科を尋ねると圧倒的に「English!」と言う声が多いのが印象的であった。教室の壁にはカラフルな果物や動物の絵が描かれ、小学校らしい明るさがあった。制服を着ている子もいたが、

児童の半数以上は私服姿で、この学校に限らず、バングラデシュの大抵の学校では制服を支給するなどということはできないそうだ。

最後に訪れたのがコックスバザールの NGO“Bangladesh POUSH”が運営する POUSH school である。ここはこれまでの学校と違いノンフォーマル教育を実施している学校である。教室では様々な年齢の子供たちが学年順に座っており、これまで見た学校と比べると校舎は１教室だけの小規模なものであった。ノンフォーマルスクールは普通、フォーマルスクールに通えない貧しい子供たちのために設置されることが多いが、この地区では周りにフォーマルスクールがないために POUSH が環境教育プログラムを実施することも兼ねて運営している。学校では政府作成の教科書の他に、POUSH による自然環境教育のための教科書が配布され、魚や木の種類や特徴などについて学ぶことができる。自然環境の授業は子供達に人気があり、熱心に植物種の名前を覚えている子供もいた。

Gomail high school の校舎

生徒たち

Banarkata primary school の教室

POUSH school 独自の教科書で勉強

３．教育に関わる社会的問題

Gomail high school の先生方に現在のバングラデシュの教育問題についてお話を伺った。現在、バングラデシュの子供の就学率は 62%で、つまり全体の約４割が学校に入学していないというデータがでているようだ。これには家が貧しく親の手伝いで働かなくてはならなかったり、体に病気や障害があったりと、原因は色々ありそうだ。そして入学はしたものの、働かねばならないため通学できない子供は全体の約 5%、卒業前に諸事情により退

学してしまう子供はまた別に 5%いるということであった。この数字は国民識字率などにも影響を及ぼしている。「人間開発報告書」によると、バングラデシュの若年層識字率（15～24 歳の人の識字率）は 2003 年の調査で 49.7%であった。これは MDGs 達成のためには厳しい数字であり、更なる改善のための取り組みが求められる。このことを知り私は、高学歴化と言わずとも、せめて子供たち全員に初等教育を受けてもらいたい、と強く感じた。文字を読むことができればたくさんの本に触れ感動することができるし、文字を書くことができれば自分の気持ちを言葉で表現することができる。読み書きというたったそれだけの能力でも、子供の世界は大きく広がるだろう。

そのような喜びを全ての子供に与えるためにはどうすればいいのだろうか。問題はそうたやすくはない。スラムに住んでいるような最貧層に位置する子供を対象に、BRAC などのローカル NGO が援助をして就学のチャンスを作るプログラムもあるようだが、それよりも最も難しいケースは親が子供を稼ぎ手として捉えている家庭だろう。NGO などの働きで子供が学校に行けるチャンスがあっても、親がそれを良しとしない場合には非常に複雑な問題になってくる。実際、バングラデシュ滞在中にどの都市でも働いている子供を何人も見た。　ダッカで窓拭きをする子供、ジョソールでレストランの食器運びをする子供、コックスバザールで漁を手伝う子供。それらの光景は私をいたたまれない気持ちにさせた。もちろん仕事をするのも大切だが、やはり子供のうちに身につけておくべきたくさんのことが学校には詰まっているはずだ。滞在中にもメンバー内で話題に上ったテーマであるが、子供が将来どんな大人になりたいと思うか、その一人一人の選択肢がどれほど目の前に広がっているかが、GDP などの数値などでは計れない真の豊かさに繋がるのだということを強く実感した。

４．最後に

バングラデシュでは外国人の存在がめずらしいようで、どこへ行っても人々の視線を浴びたが、特に小学校訪問時には大勢の子供たちが集まり、熱烈で無邪気な好奇心によって私たちを迎えてくれた。教室にいるときはみんな先生の話によく耳を傾け、授業中にも一生懸命に話を聞いている様子を想像できたし、質問にはすっと起立してはっきりとした答えを返してくれた。私はたまに勉強や宿題を億劫に感じていた子供だったが、本来何か新しいことを学び、知識を得ることはとても楽しく素晴らしいことなのだということを、改めて彼らから教わったような気がする。一人でも多くの子供たちがこの喜びを感じることができるようになるためにはどうすればよいのかを、これから考えていきたいと思う。

ケシャプールの小学校訪問のあとで私たちについてきた 5 年生のクラスの女子の一人が、「なんのためにここへ来たのか、日本ではどんな文字で勉強しているのか、どうしてメモを取っているのか」などと照れながらも熱心に質問をしてくれた。バングラデシュではシャイな子供が多く、特に女の子がこんなに積極的に話しかけてくれると思わなかったので驚いた。きっと外国の文化に興味があり、知りたいこと、未知なことがたくさんあるのだろう。彼女の探究心を満足させられる回答ができたかわからないが、これからも彼女が知りたいと願う数々の事柄が、ひとつひとつ知る喜びに繋がってくれればと願ってやまない。

教科書を大切そうに抱えている子供たち・研修センターの近隣で

【参考文献】

人間開発報告書 2005　国連開発計画　2005 年出版 p308

２－５　バングラデシュの農村

古田　美幸

研修を通して見た農村の姿

バングラデシュは、1 億 3,810 万人（2003 年、世銀調査）の人口を擁し、その内 4 分の 3 が村に住んでいる。研修先で目にした農村の風景は特別に印象に残っており、そして、そのような農村の眺めを典型的なバングラデシュの風景と感じると、ある NGO の現地スタッフが言われた。

今回の研修では、ダッカ近郊、ジョソール近郊の農村を訪問する機会に恵まれた。バングラデシュの農村の景観は美しく豊かに見えた。敷地は、池と前庭、母屋、牛小屋や台所があり、区画されていて、庭もきれいだった。かつて「黄金のベンガル」と歌われたほど、豊かであったバングラデシュ。その豊かさは、イギリス統治下（1765～1947）において、ジュートの栽培によってもたらされたものであった。訪問先でも、点在する池でジュートをふやかし、庭先で繊維と芯とを乾燥させている光景をよく目にした。そして、牛やヤギ、アヒルやニワトリがあちこちに見られ、あの光景は貧しさを想像させるものではなかった。加えて、農村では、内部でものが循環していた。田畑で食料は生産しているし、牛糞を乾燥させて燃料として使うなど、エコでさえあると思った。

一面に広がる田

民家の様子

農村居住者の基本的な生活は、午前中は農作業に従事し、昼間の日差しが強く暑い時間帯は家で休息を取り、その後、再び働き始めるそうだ。また、都市部でも同様であったが、農村でも公の場では女性の姿はあまり見なかった。都市部では弱まっているものの、農村ではイスラム社会の慣習である男女隔離の原則”パルダー”がより強く働いており、女性はある一定の範囲内から外へ出ることは稀である。そのため、食料の買出しも男性が代わりに行う。なんと女性用の下着まで男性が買ってくるそうである！

農村では子供の多さが目に付いた。砒素問題視察の際に訪問したシャムタ村で聞いた話では、平均して 4、5 人子供を持っており、多いところでは 7 人もいるそうである。そして、子供が幼い妹や弟の面倒を見ている様子もしばしば見かけた。

また、若者がバザール周辺などでふらふらしているのが目立った（これは都市部でも同

様であったが)。彼らは農業を嫌い、ホワイトカラー志向であるが、農村では都市以上にその様な職業に就業できる機会は制限される。そうして彼らは農業に従事せず、さしたる就職先もなく、彼らは進むべき道をなかなか見つけ出せない。しかしながら、結婚を機に、生活のために農業を始めるケースが多いようである。

バングラデシュの農村は美しく牧歌的でさえあるように感じた。しかしながら、私が農村に対して抱いたこのような感情は、きっと町から来たヨソ者が感じる、一種のノスタジーのようなものに過ぎないのだろう。実際、農村の貧困は家計収支や土地所有などの統計のデータで見ると深刻で、貧困撲滅計画は進んではいない。食糧問題、均分相続による土地の細分化、人口抑制、都市との格差または農村内での格差の問題、女性の社会的地位の向上など、問題は山のようにある。

シャムタ村の人懐っこい子供たち

現在、様々な農村開発のための試みが行われている。例えば、今回研修を通して視察した農村開発の現場では、組合組織を作り住民の自発的管理能力の強化が目指されていた。そもそも、バングラデシュの農村では村落の境界が可変的で、共同体としての意識が低いという。その様な条件下で、諸 NGO は、少人数の住民組織（ショミティと呼ばれる）の結成を進めた。もともと農村自治地域であったベンガルの地にかつて存在した共同体の意識を開発に利用しようというものである。これはグラミン銀行も利用しており、債務者の相互監視の組織として機能させ、成功している。

バングラデシュの農村には、イスラム文化であったり、ベンガルの地域で歴史的に育まれてきたものであったり、現在でも色濃い文化、固有の価値観が残っている。農村開発や援助をする側は、それらを理解し、臨機応変に対応し逆に利用していかないと十分な成果は望めないと思う。

【参考文献】

西川麦子　バングラデシュ／生存と関係のフィールドワーク　平凡社　2001
海田能宏編　バングラデシュ農村開発実践研究　新しい協力関係を求めて　コモンズ　2003

２－６　バングラデシュにおける開発と環境保全　～持続可能な社会に向けて～

李　尚美

「開発」と「環境」をキーワードにしてバングラデシュという国を見ようと出発前に決めていた。行程中にこのキーワードに引っかかったもののうち、以下では、工業化を目の前にして考えたこととエコロジーについて書くことにする。

（１）工業化が進むバングラデシュ　～海外進出企業の現地の実態～

（ｉ）関心

現在、日本および多くの先進諸国ではCSR（Corporate Social Responsibility; 企業の社会的責任）という言葉が飛び交い、多くの企業が取り組んでいる。CSR に含まれている分野には、ガバナンス、マーケット、雇用、社会貢献、環境などがあり、多岐にわたっている。

現在、多くの企業がグローバル化の下海外進出する中で、現地でのCSRの実態はどうなっているのだろうか。特に、雇用や環境の分野については、どのように取り組んでいるのか。労働環境や環境汚染の問題と関わっており、とても興味深い。今回の研修中、YKK を訪問する機会があり、そこで見聞したことをもとに、考えたことをまとめる。YKK1社だけを見て、海外進出をしている日本企業全体のことに言及するつもりはもちろんないが、以下はふと考えたことである。

（ii）緩い基準につけこむ先進国企業の功罪

レンガ工場

多くの途上国では、労働や環境についての基準が先進国に比べて緩いことが多い。このことおよび人件費の安さなどが、先進国企業にとっての海外進出のメリットとなっている。そして実際、バングラデシュでもそうであった。

このこと自体、実は問題ではないだろうか。というのは、基準の緩い途上国に進出し、確かに現地では先進的な取り組みであっても、本国では誉められることではない程度のことを自慢している工場長の姿を見て、疑問に感じたからである。確かに途上国に進出する企業側の戦略ないしメリットも理解できる。しかし、滞在国の現在の法制度では合法で、むしろ先進的かもしれないが、先進国から来た企業がそのようにしているのは、滞在国の基準に甘えているだけであり、大きく見ればただ単に公害を輸出しているだけではないだろうか。

（iii）提案と現実

ここでもし、途上国政府が法整備をして、先進国並みの厳しさにしたらどうなるのだろうか。途上国内の企業は壊滅的な打撃を受けるかもしれない。ただ、例えば、その新しい法律の適用をEPZ内にとどめることは可能であって(例:入居の条件にしてしまえばよい)、外国企業のみに適用し、公害輸出の公式をなくすことはできるかもしれない。しかしそうなると今度は、先進国企業は進出を鈍るのだろうか。もっと基準の緩い国を見つけて、そ

ちらにいってしまうかもしれない。だとしたら、バングラデシュ政府がなかなか法改正をしない理由がわかる気がする。つまり、環境に配慮して外国企業の進出をよせつけなくしてしまうのか、環境は度外視して外国企業を誘致して雇用の場を提供し、ゆくゆくは国の経済発展につなげるのか。ここに環境保全か開発なのか、という問題が見られる。

（iv）まとめ

先進国企業が途上国に進出して、自国より緩い規制しか守っていないことにずるさを感じる理由は、その基準では安全や健康は守れないと過去の事例から知っていて、なおかつ、自国では厳しい基準を通過する技術を持っているのにもかかわらず、進出先ではそれをやっていないこと。ただ単に拠点国の法制度だけ守っていたらよいのか、それとも地球的規模および長い目で考えて、今から最新の技術を取り入れるのか。

（少なくとも）先進国ではCSRが注目され、様々な指標によって企業の活動が評価され、それが株価や消費者にも影響を見せている中で、企業の社会的責任とは何なのか。ある国の市民がそういう目を向けなければ、何をしても良いのだろうか。いずれにせよ、現状では前者のように考える企業が多く、企業倫理を疑わざるを得ない。また、一刻も早くバングラデシュの市民がこのような企業に対し、ものを言えるようにすることも必要である。

（2）エコロジカルな国

バングラデシュに3週間滞在して予想外だったことの一つに、バングラデシュがエコロジカルな国だということがある。以下、ここでは「環境」面で考えたことをまとめる。

（i）行程中に目にしたものから

バングラデシュがエコロジカルだと感じたのは、少なくとも3つのことを目にしたからである。

農村の風景

第1に、景色である。農業に従事している人が多いせいだろうか、それとも緑が多いせいだろうか。車両移動中に外の景色を眺めていても、田畑や木が多く、あたり一面が緑色である。雨季だからというのもあるだろうが、緑が生い茂り、生き生きとしている印象を受けた。

第2に、有機農法への取り組みである。PROSHIKAやUBINIGでは、近代農法の弊害が出てきたために、有機農法を農民たちに奨励していた。それは、農薬や化学肥料を大量に使って土壌をダメにするのではなく、自然の循環に合うような方法での農業である。人間側の都合に合わせるのではなく、あくまで自然のリズムに合わせた、自然と調和型の農業。

第3に、オイスカセンターにいるときもエコロジカルだと感じた。例えば、鳥の解体作業のときである。この作業では、足も頭も羽も全部売れるので、捨てるものは何もないという。つまり、どの部分も人々は使うのである。

以上のようなことからふと、この国自体、すべてが循環しているのではないだろうかと思った。例えば、家畜のフンを棒状にして燃料にしたり、肥料にしたりしている。私たちが食べ切れなかったご飯は、犬のえさになっている。卵を拭く布だって、下はズボンかシャツのぼろきれ。蔓に絡ませるために短い布切れをつなげて長くした、これもビニール製ではなく、布切れだった。例を出せばきりがないが、とにかく無駄がないように感じた。

オイスカセンターの周囲

きっと昔の日本もこうだったのだろう。大量生産･大量消費社会に慣れきった私達には、こうした光景が真新しく思える。そもそも発展とは何なのか、そしてバングラデシュにとっての発展とは何を目指すのか。

（ii）その反面

バングラデシュはエコロジカルな国だと感じたのは以上のような理由からだが、もちろんそうではない部分も目の当たりにした。例えば、そこら中にゴミを捨てる習慣および道端のゴミの多さがある。プラスチック製品などが入ってくる以前は、そのような習慣でも時間を経れば自然の一部となり良かったかもしれないが、今はそうはいかない。習慣を無視して新しいものを取り入れていくときの弊害である。

今後、バングラデシュの人達がこういった習慣が時代に合わないものだと感じ、やめようと努めたなら、今よりももっとエコロジカルな国に映るだろう。

ごみ収集 BOX の周りに散乱するゴミ

（3）持続可能性

ここでは、日本とバングラデシュ、どちらの方が持続可能か？を考えたい。「持続可能性」というのはあまりに曖昧な概念なので、次のような問いを立てること自体無意味なことかもしれないし、何について注目するかにもよるが、この問いに試みたい。（ただし、政治や経済の面は度外視することにする。）

まず、現在の状況をみる。両国間には、経済的なギャップがあることは誰しもが認める事実である。そして国家間の経済格差だけではなく、人々のライフスタイル、特に資源の使い方も異なる。

次に、持続可能な地球および暮らし方を想像する。地球上のすべての人が現在の先進国の人々のような暮らしをしたら、地球一つでは到底足りない。そこで、すべての人が等しく資源を使うと仮定して、どうにか地球一つ分の資源供給でやっていこうとしたときに、持続可能な生活水準が出てくる。この生活水準にするためには、現在の先進国の人々のライフスタイルは保つことができず、レベルを下げることは避けられない。しかし、途上国の中には、現在の状況がこの生活水準の近辺にある国や、それ以下の国があるだろう。

再び、現実を考える。ライフスタイルを変えることは、たとえそれが必要だといわれ、頭では理解しても、それを実行するのは大変難しい。ましてや、先進国の市民がその生活水準に合わせるために努力する方が、途上国の人々が同じようにするのよりも、困難は大きい。

結論としては、食料の自給率や前に述べた循環社会、現在の経済状況からすれば、明らかにバングラデシュの方が持続可能ではないだろうか。

Cox’s Bazar で見た夕日